



Title	心の個別性の観点からみた伝わらなさの体験に関する臨床心理学的研究 ―イニシエーションをモデルとして―
Author(s)	二宮, 幸大
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87795
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (二 宮 幸 大)

論文題名

心の個別性の観点からみた伝わらなさの体験に関する臨床心理学的研究
—イニシエーションをモデルとして—

論文内容の要旨

本研究は、自分の想いや気持ちが重要な他者に伝わらないと感じる伝わらなさの体験が、実際どのようなものか、それに対して心理療法はどのような援助ができるかについて、理論、質、実証、事例の観点から検討したものである。

第一章では、臨床心理学において、伝わらなさの体験を直接的に取り上げた先行研究が見られない中で、「つつめけ体験」「秘密」「共約幻想」「共約不可能性」「イニシエーション」といった概念を参照し、伝わらなさの体験に対する仮説的視点を提示した。伝わらなさの体験は、外的な他者との関係だけでなく、その人自身の内面との関係の問題でもあること、健康な個別の心の発達、成長には、伝わらなさの体験も必要であること、伝わらなさの体験を通して、価値観の問い直しや試行錯誤をし、自他や世界に対する感じ方や関係のイメージが再構成されうること、その過程はイニシエーションをモデルとして捉えられることを理論的に示した。

第二章では、伝わらなさの体験の記述的な理解と、臨床心理面接においてその体験を話題にする治療的意義を基礎づけることを目指して、人工的ではあるが臨床心理面接と類似した状況において、4名の非理臨床群の大学生に対してPAC分析を用いたインタビューを行い、イニシエーションの観点から検討した。伝わらなさの体験過程には、それまでの共約幻想的な関係から分離される感覚のほか、自分の感情や感覚、他者との関係がうまく掴めなくなるような孤立、疎外、曖昧さの感覚や感情が伴っていた。一方、インタビューに参加し、伝わらなさの体験の語りを支える他者を得ることで、その体験を言葉にするプロセスは再開、進展し、価値観や関わり方の再検討と試行錯誤を経て、他者との関わりに対する見え方や感じ方が再構成されるイニシエーションとして機能しうることを見た。このことから、伝わらない体験を改めて他者に語ることが、その体験を再構成する重要な契機となることが示された。

第三章では、心理尺度を作成し、伝わらなさの体験が2つの因子で捉えられることを見た。すなわち、伝わらなさによって、他者との隔たりが浮かび上がり、自身の感情や想いが溢れてまとまらなくなる「想いの置き所のなさ」因子と、時間やエネルギーをかけてもがき、伝わらなさの体験を通過することで、伝わらなさの体験のされ方自体が新しくなる「通過による開け」因子である。共分散構造分析の結果と、実質科学的な観点から、次のように考えられた。われわれは、想いや気持ちが他者に伝わらないことに直面すると、「想いの置き所のなさ」を体験することがあり、それは、「孤立感」や「抑うつ」を強める。他方、伝わらなさに対して同時的あるいは事後的に試行錯誤する過程を経る中で、予期していたのとは異なる出口として、互いが異なる個人であることを改めて実感する、相手や自分を新しく発見する、やっと伝わるという「通過による開け」を体験することもある。それにより、他者との繋がりの様相が変容し、「孤立感」も和らぐと考えられた。ここから、心理療法は、「想いの置き所のなさ」を体験しているクライアントが、「通過による開け」を体験し、他者や自分自身の内面と繋がりをもった個別の心を再構成するための関わりや場所を提供するのではないかと考えられた。

第四章では、4名の臨床事例による累積的事例研究を行い、伝わらなさの体験に関する心の動きの本質や典型性を捉えることを目指した。生活世界で関わる重要な他者とのあいだで伝わらなさを抱えるクライアントが、聴き手、見守り手としてのセラピストを支えに、伝わらなかった体験や想いを言葉や形にし、象徴的な死や別れという心の極限状況を通過することで、伝わらないという体験自体はなくなるとも、新たな視界が開けてくるプロセスが浮かび上がった。そこでのセラピストの役割は、自身のあり方を揺さぶられ、試行錯誤しながら関わり、クライアントの世界に参入してゆくこと、それを通して、クライアントが伝わらなかった体験や想いを「自分の体験」として育て、吊い、拾い直す心的作業を触発し、支えること、さらに、そのプロセスに伴う死や別れのテーマやイメージにも目を向けておくことと考えられた。伝わらなさに対する心理療法は、クライアントが、他者から十分に目を向けられず、受け取られなかった伝わらなさの体験や想いを言葉や形にし、「自分の体験」として育て、自身の中にその置き所を作ってゆくことを支える。そして、クライアントの心の枠組みを更新、拡張、変容させ、彼らが自分自身の内面や他者との繋がりをもった個人として、心の個別性を生きてゆくためのイニシエーションを触発、促進させると考えられた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (二 宮 幸 大)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	老松 克博
	副 査	教 授	野村 晴夫
	副 査	准教授	佐々木 淳

論文審査の結果の要旨

臨床心理面接は非常に広範かつ多様な問題を扱うが、ほぼすべての事例に見られる根本的な、あるいは潜在的な訴えとして、「自分の想いや気持ちが重要な他者に伝わらない」という絶望体験がある。こののつびきならない事態をめぐって、その本質が那邊にあるか、そしてそれに対して心理療法はいかなる援助をなしうるか、総合的・体系的に解明しようとした臨床心理学的研究は意外にもほとんどない。本論文は、この漠として糸口を見出しにくい難題への果敢な取り組みの軌跡であり、質的研究、量的研究、事例研究を含む全5章で構成されている。

第一章は理論的研究で、直接的先行研究の乏しいなか、「つつぬけ体験」「秘密」「共約幻想」「共約不可能性」「イニシエーション」といった近縁領域の諸概念を参照し、伝わらなさの体験に対する仮説的視点を提示している。すなわち、この体験は、外的な他者との関係のみならずその人自身の内面との関係にも関わっていること、健康な心の発達・成長にとって必要な体験でもあること、価値観の問い直しや試行錯誤を促し自他と世界への感じ方や関係のイメージを再構成する契機となること、イニシエーションをモデルとして捉えうる過程であることなどである。

第二章の質的研究（研究Ⅰ）では、伝わらなさの体験の記述的な理解とこの体験を語ることの治療的意義の基礎的把握を目的として、臨床心理面接類似の状況設定で非臨床群の大学生にPAC分析を用いたインタビューを行い、イニシエーションの観点から検討している。伝わらなさの体験過程には、それまでの共約幻想的な関係からの分離感のほか、自分の気持ちや他者との関係を掴みにくくなる孤立感と疎外感を伴っていた。一方、インタビューにおいて伝わらなさの体験をあらためて他者に語ることが、その体験の頓挫していた言語化を促進し、価値観や他者との関わりの捉え方を再検討・再構成させる一種のイニシエーションとして機能することが明らかになった。

第三章の量的研究（研究Ⅱ）では、心理尺度を作成し、伝わらなさの体験が2つの因子で捉えられることを見出している。すなわち、伝わらなさによって他者との隔たりが前景化し想いが溢れてまどまどなくなる「想いの置き所のなさ」因子と、伝わらなさの体験を苦しみながら通過することで当該の体験のされ方自体が更新される「通過による開け」因子である。くわえて、統計的分析の結果から、想いの伝わらなさに直面すると人は「想いの置き所のなさ」を体験し「孤立感」や「抑うつ」を深めるが、そこでの試行錯誤により、互いが異なる個人であることを予期せず発見・実感するなかでやっと想いが伝わる「通過による開け」を体験し「孤立感」が和らぐ、という可能性が見出された。このことから、心理療法は「想いの置き所のなさ」を体験している人が「通過による開け」を経て他者や自身とのつながりを伴う個性を再構成する場所を提供しているのではないかと指摘がなされる。

第四章の累積的事例研究（研究Ⅲ）では、4つの臨床事例を通して、伝わらなさの体験にまつわる心理療法の過程の本質が考察されている。クライアントたちは、聴き手・見守り手としてのセラピストを支えに体験と想いを言葉や形にし、象徴的な死や別れという心の極限状況を通過することで、新たな視界が開けてくるプロセスを歩む。

第五章では、全体のまとめとして、伝わらなさの体験に対する心理療法のあり方を提言している。要諦は、クライアントが他者に受け取られることなく頓挫していた体験や想いを「自分の体験」として弔い、拾い直し、育てて、自身のなかに置き所を見出すのを支えること、彼らが孤立とは異なる個性を獲得するのを促進することにある。

本論文は、多角的・体系的なアプローチによって得られた知見にもとづき、伝わらなさの体験という心理臨床の根本問題に対してオリジナリティに富む有意義な示唆を行った労作と言ってよい。論文審査の結果、本論文は博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。